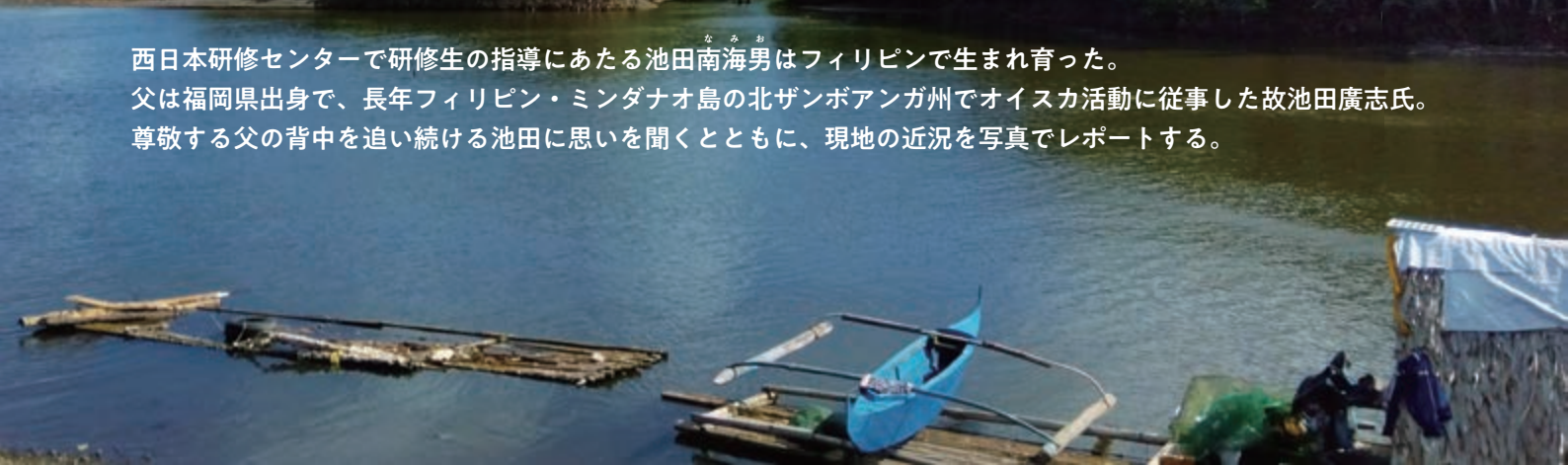


“南の海”を愛した男が 託した未来

～フィリピン・ミンダナオ島の今～

西日本研修センターで研修生の指導にあたる池田南海男はフィリピンで生まれ育った。父は福岡県出身で、長年フィリピン・ミンダナオ島の北ザンボアンガ州でオイスカ活動に従事した故池田廣志氏。尊敬する父の背中を追いつける池田に思いを聞くとともに、現地の近況を写真でレポートする。



西日本研修センターの出荷準備の様子。後列右端が本人

池田 南海男 (いけだ なみお)

1977年生まれ。ミンダナオ島のディポログで生まれる。故池田廣志氏が南海ホークス（現ソフトバンクホークス）のファンだったため、南海男と命名されたと言われている。大学卒業後、オイスカ開発教育専門学校（現オイスカアグリカレッジ）で日本語を学び、2004年に開発団員としてミャンマーへ。フィリピンで養豚業を営み、25年にオイスカに復職。3児の父。子どもの名前はあいこ、ひろし、しずか。すべて父がつけてくれたものだという。

——南海男さんは今、どんなお仕事をされていますか？
2025年8月から西日本研修センターでの勤務が始まり、毎日農場に出ています。研修生の指導をしながら、農場で生産した野菜などの出荷をはじめとする、研修農場運営に関わる全ての業務に携わっています。

04年から3年間ミャンマーに駐在した後、オイスカでの活動を続けたかったのですが、結婚して家族がフィリピンにいたので、子どもが幼いうちは一緒に過ごそうと思いい生まれ育ったミンダナオのディポログ市に戻りました。そして、日本で養豚を学んだ研修生OBと一緒に、養豚を始めました。私も養豚はミャンマーで体験していたので、事業は順調でしたが、地域全体にASF（アフリカ豚熱）が蔓延してしまい、残念ながら私たちの養豚場も続けること

ができなくなってしまいました。子どもも大きくなったし、これを機にまたオイスカに戻ろうと決めて今に至ります。

——お父さん、池田廣志さんは南海男さんにとってどのような人でしたか？
それはもう、すばらしい人です。日本人でありながらフィリピンに行って現地の人の生活のために尽くしていたことをとても尊敬しています。誰にでもできることではありません。

最初に入った地域は宗教的な対立から衝突が続く場所でしたし、長く植林支援を続けていたパマンサラン村や、その奥地のバージニア村は、共産ゲリラNPA（新人民軍）に所属する住民が多い地域でした。一般的には危険と考えられていたところに日本人が飛び込んで活動していたというだけでもすごいことだと思います。子どもの頃、よくパマンサランに連れていかれましたが、昔は道がなくて車では行けなかったんですよ。センターでは少しの米と干し魚一尾といったわずかな食事で過ごしていました。住民と同じような生活をしていました。



地域に受け入れられる一因だったのかもしれない。

特に尊敬している点は植林を地道に続けてきたことです。植えることは誰でもできますが、大変なのはその後の管理です。苗木が大きくなるまでは草刈りが欠かせませんし、枯れば植え替えもしなければなりません。研修生OBたちの協力を得ながら、それをずっと続けて森を再生させてきたのです。

バージニア村にはスンキラオの滝がありますが、その周辺にも日本から来たボランティアとたくさん植林をしていました。以前は道路が整備されていなかったため、山道を長時間もかけて歩いて行きました。今はデイボログ市がきれいに整備しているので、街



池田 廣志 (いけだ ひろし)

◎1941年—2014年

福岡県出身。1970年に30歳でオイスカに入職。前職で社員教育係として人材育成を実践してきた経験を活かし、西日本研修センターで研修生指導に当たる。翌71年、開発団員としてフィリピン・ミンダナオ島へ渡り、農業指導の傍ら、南ミンダナオ大学の農学部設立に奔走。「理論は実践があつてはじめて実を結ぶ」を掲げた指導に大勢の青年が集まった。宗教的な対立による紛争の負傷者の対応を続ける中、在比大使館によるミンダナオ島からの退出勧告を受けるも、拠点を島の最北部に位置するデイボログ市に移して活動を継続。同市内の大学にも農学部を設立し、農業研修を実施。その後オイスカ独自の研修センターを設置し、植林プロジェクトも開始。日本からも大勢が研修に訪れ、池田氏の指導を受けた多くの若者が、各国の国際協力の現場で活躍した。



パマンサラン研修センターに隣接する小学校。校舎の裏に立派な森が育っているのが分かる。村の多くの場所がこのように森になっている。オイスカが植林をしたことで村に人が増え、にぎわってきたため「オイスカ村」と呼ばれていたこともあった。以前は村に電気が通っていなかったが、今は学校にも電気が来ており、教室に扇風機や照明設備が設置されたことで、子どもたちが学習に集中できる環境が整ってきている



に住んでいる人たちも車で来られますから、人気の観光地になっていきます。滝の周辺に木がなかったら乾季には水が枯れるかもしれないし、人が見に来たいと思うような美しい景観にはなっていないかもしれないかもしれません。そんなところにもオイスカの植林は貢献していると思います。

山での植林だけではありません。ダピタン市でのマングローブ植林も、父が最初に始めたものです。ディポログからダピタンに行く途中、サンペドロの橋から大きなマングローブ林（6ページ上の写真）が見えるのを知っていますか。あれも全部オイスカで植えたものです。エビなどの養殖池の造成のためにマングローブが伐られてしまった場所もあれば、薪などのために伐られてしまった場所もありました。そうしたところに少しずつ植林をしてきました。植えても波で流され、また植えての繰り返しでした。見事な森になった今、多くの人が写真を撮りに来るなど、注目してくれています。当時は、そうした地道な取り組みには誰も目もくれませんでした。

——お父さんの功績を後世に伝えていく必要がありますね

父は自分の名前を残したいと思っていたわけではありません。ただ森が残れば良いと思っていたのだと思います。森は長きにわたり人々に恩恵をもたらす財産です。父はもういませんが、父が育てた森が今も人々の生活を支えているのは、とても誇らしい気持ちです。それだけで充分ですが、父の活動を日本から応援してくださっていた多くの方々には、今、森がどうなっているのかをきちんと伝えていかなければならないと思っています。特に父の出身地の福岡県からは、毎年現地に足を運んで一緒に植林に参加してくださいました。私もずいぶんかわいがってもらったのを覚えています。

父の病気が分かった時に、医師でもある妹と私とでもう仕事を辞めるように説得したのですが、ひどく怒られてしまいました。最期ของときまでオイスカの活動を気にかけていました。父ほどの情熱をもって人生をかけて頑張るといふのは、誰でもできること

ディポログ & ダピタンの今



ダピタンのマングローブ植林を担当してきたOB/ノンさん。バイリマゴにも立派な森が育っている



バマンサラン研修センターの裏から下った小川に作られた水浴び場。30年以上前から村の人たちが水浴びや洗濯をしている

ディポログ市内で最近増えているバオバオ。バイクの横にカートをつけた昔ながらのトライシクルもたくさん走っているが、バオバオの人気の高い



ディポログで人気のバオバオ！



多くの観光客が訪れるスンキラオの滝



ではないと思います。今もフイリピンで活躍されている渡辺重美先生（バゴ研修センター所長）や、私がミャンマーでお世話になった岡村郁男先生（ミャンマー農林業研修センター開発技術員／当時）も同様に、本当に特別な人たちだと思っています。

森だけではなく、父の遺志を受け継いで活動するOBたちも大勢います。今もディポログで育ったオイスカのOBたちがふるさとでの農業の発展のために活躍していますし、中には日本のオイスカ研修センターで農業を指導しているOBもいます。かつて農業研修を行っていたバマンサラン研修センターやピニアン研修

センターでは、今は研修生の受け入れをしていません。ただ、父がバマンサランに作ったエコテックハイスクールが公立高校となり、センターに代わる若い農業人材育成の拠点になっています。

——南海男さんも池田さんが育てた人材の一人ですね

父の姿は子どもの頃から見ていましたし、日本で勉強し、ミャンマーで活動をするきっかけをくれたのも父でした。父のように人生の大半を他人のために尽くすような生き方は自分にはできませんが、今与えられた場所で、精一杯頑張ることで父を支えてきてくれた人たちに恩返しができたらうれしいです。



上／北ザンボアングアのOTTA(OB会)メンバー(後列)の会合にマニラ事務所および本部からもスタッフが参加。この日、後列右から5人目の三澤マリアさん(1992年東京)の会長就任が決まったほか有機農業セミナーの実施についても話し合われた(26年1月29日)

左／実現した有機農業セミナー(2月17日)



ディポログ市に移管したものの現在は使われていないバマンサラン研修センターの建物。建物前にあるフィリピンイーグルは今も残っている(本誌12ページ参照)。



バマンサランエコテックハイスクール。トラクターなども配備された実習農場



ピニアン研修センターも建物はあるものの、研修は行われていない。敷地の一部はフィリピンコナツ庁が育苗などに活用している

ディポログ市内にも日本食レストランが!



ディポログ市内の多くの学校で「子供の森」計画による森が育っている